

Support for **Woman Doctors** ～私からあなたへ～

豊田(林田)典子 先生【千葉県 13期】

国保多古中央病院 内科
お子さんは 17 歳、13 歳の二人



春爛漫の多古中央病院と愛車フィット

「足下の四つ葉のクローバー」

医者になって 25 年が過ぎました。

振り返ってみると、私の医師人生は、頭でっかちの優等生だった田舎の高校生があまり深く考えもせず、自治医大というちょっと変わった大学に入ってしまったことから始まりました。学生時代、「地域医療」という名の洗礼を受けつつも、自分の行く先がさっぱり見えず、不安ばかりが膨らんでいました。入学当時、まだ義務年限を終えた先輩方はいなかったので、9 年間で果てしなく続く幽閉の時間のように感じられたのです。

ところが、卒業してからは、あつという間でした。「女性は要らない」とおっしゃっていたカリスマ院長先生のいる研修病院で(大学 5 年の時、母がこの病院で亡くなりました。「2 年後だったら貴女をぴったりつけてあげられたのに」という院長先生のお言葉にすっかり心を奪われ、飛び込みました。)一生懸命働きました。「これだから女は・・・」と言われてしまうことが怖かったのですが、実際は、行く先々で可愛がってもらい、とても幸せな研修と義務年限を過ごせたと思います。未熟な女医に担当される患者さんは気の毒でもありましたが、実力以上に私を買ってくれたり、人生を語ってくれたり、時には正直に不安を口にしたりで、私を育ててくださいました。その結果、臨床が大好きになりました。

31 歳で遅い結婚をして翌年長男を授かりました。生まれるまで、「きっと誰かが育ててくれる」と甘く考えていましたが、親族も含め、皆自分の役割があり、全面的に子育てを任せられる方は見つかりませんでした。赤ん坊はびっくりするほど、母親が好きで、こんな怠け者の母なのにひたすら後を追ってくれました。職場の理解と支援と、地域の方々が声をかけてくれたり、励ましてくれたりで、次男が生まれるまでの 5 年間で息子と二人、病院近くのアパートで過ごしたことは楽しい思い出です。次男が生まれて、中途半端な自分の仕事、あり方を考え直し、そのまま地域の病院に残って、週 4 日短時間の非常勤勤務になりました。子どもたちは大きくなり、中学生と高校生、親子で馬鹿な話をしたり、受験勉強をしたり、仕事の失敗を話したりできるようになりました。(夫(フルタイム外科医)とは「弁当作りは誰の仕事か?」をテーマによくけんか・・・ごめんなさい。9 割以上パパの手作りです!)セブな生活とはほど遠くおもしろおかしく暮らしています。

食事療法実践が困難な 92 歳の糖尿病男性患者がいます。外来に来ると、1 ヶ月の出来事を夢中で話していくので、傾聴してはいたのですが、おつきあいも長くなったある時、「不思議だね。ここに来ると母親に話を聴いてもらっている気になるんだ」というのです。40 歳以上年下の私が?おかしくなってしまうしましたが、医者というのは、そんな存在かもしれないと感じるようになりました。

地域医療、内科外来においては、患者に寄り添い価値観を理解し最良の医療を提供できるよう知恵を絞ることが大切だと思っています。女性であること、年を重ねることは、決してマイナスにはならないと考えながら、診療を続けています。いろいろな選択の場面で必ずしも最善の道を選ぶことはできなかったかもしれませんが、幸福観は人それぞれということがやっとわかってきました。私の場合、息子たちが四つ葉のクローバーは足下にあることを教えてくれたのだと思っています。

後輩医師・学生へ一言メッセージ

『謙虚な自信』

故中尾学長先生が卒業式にくださった言葉
私の座右の銘です。